

舞踊文化 ETC

No.28

目 次

- 三種の神器・・・・・・・・・・諏訪 春雄—— 1
- 自然人アイヌ / こころの歌と踊り・・・四宅 豊次郎—— 4
- アジアの舞踊、おりふしの想い・・・丸茂 美恵子—— 7
- 彩色画「落成宴図」に見る韓国舞踊・・・伊藤 好英—— 11
- 民俗芸能のいま・・・・・・・・・・齊藤 裕嗣—— 13

三種の神器

諏訪 春雄 学習院大学名誉教授

2019年は平成最後の年であり、新天皇が誕生する。それに伴って三種の神器に対する関心も高まっている。三種の神器とは何か。この記念すべき年に本質を考えなおしてみよう。

三種の神器 鏡は太陽

三種の神器は通常次のように説明される。「歴代の天皇が皇位のしるしとして受け継いだという三つの宝物。八咫の鏡(やたのかがみ)・天叢雲剣(あまのむらくものつるぎ)、草薙剣(くさなぎのつるぎ)・八咫瓊勾玉(やさかにのまがたま)。みくさのみたから。みくさのかむたから。」(『大辞泉』小学館)。

八咫鏡と勾玉が作成された事情は『古事記』の天の岩屋戸神話にある。アマテラスが岩屋戸に籠り高天の原は暗黒になった。困った神々は思金神の提案に従って常世国の長鳴鳥を集めて鳴かせたのち、「鍛冶の神に鏡と勾玉を作らせた」とあって、鏡と玉は一对で登場している。

『日本書紀』の記事もほぼ同じであるが、第一の一書には、神々から相談された思兼神が「天照大神の御姿を象り作って招き寄せましょう」と提案して、鏡を作っている。八咫の鏡は太陽神である天照大神の姿に似せて作られている。八咫鏡は太陽の象徴であった。

対となる鏡と勾玉に、のちに草薙剣を加えて、三種の神器となるのは、日本人の聖数である三の原理が働いたからである。日本人は古代の神話以来、あらゆる価値ある伝統を三種でセットとした。剣が魔払いの武器であることは世界共通である。

円形の金属鏡が太陽を表わす例は、中国南部の少数民族にもみられる。左の写真は中国貴州省^{れいへい}黎平県トン族の道切(道の守護、日本の道祖神にあたる)に飾られた銅鏡で太陽を表わす。右は、同じ貴州省ミャオ族集落入口である。門に蛇から進化した竜と太陽が飾られている。太陽と蛇が組み合わせられて登場する例は台湾原住民社会にも一般化している。



銅鏡(貴州省黎平県^{れいへい}トン族)



集落入口門(貴州省ミャオ族)

勾玉は蛇

八咫鏡が太陽、劔が武器の象徴であることを認める人でも勾玉が蛇であることには抵抗感を持つかも知れない。しかし、重要な視点は、身体の装飾としての珠にはいろいろな形があったのに、なぜことさらに勾玉が選択されたのか、である。下の写真左は三輪山の麓から、右は出雲大社境内から、それぞれ出土した玉飾で、勾玉は湾曲し、頭部に穴のあるものである(古代歴史文化協議会編『玉—古代を彩る至宝—』ハーベスト出版、2018年)。



勾玉(左:三輪山の麓、右:出雲大社境内)

飾りなら円形玉器のほうが見栄えがするはずだが、わざわざ勾玉が選ばれたのは、蛇を象徴するからである。下の図は中国成都と台湾栗林県の道観の太極図である。三種の神器の勾玉は、この太極図に関係するというのが、私の考えである。



太極図 (中国成都)



太極図 (台湾栗林県)

太極は中国の『易経』や『漢書』に、万物を生成する根本のエネルギーとされ、太極図は太極を図像化したものである。太極図の成立について、二匹の蛇が互いに相手の尾を噛んでいるウロポロス図に求める説が有力である(中野美代子『中国の妖怪』岩波新書、1983年)。

蛇の信仰はほとんど地球規模で広がっている。中国では、殷周時代の青銅器にすでに二匹の蛇が互いに相手の尾を噛んでいるウロポロスの図や、二匹の蛇が頭部を中心に丸く輪になって絡みあう模様が現われており、漢代になって出現する太極図の前身が絡みあう二匹の蛇にあるという推定は動かない。蛇、さらにそこから展開した竜は、中国人にとっては、祖先神であり、天地、生命、陰陽、豊穰などの象徴の体系となっていた。次の写真は二匹の蛇がからむ漢代画像石の伏羲女媧図^{ふくぎじょが}。いうまでもなく、伏羲女媧は漢民族の祖先神である。



伏羲女媧図①



伏羲女媧図②

ここで強調しておきたいことがある。日本の勾玉が蛇を表現することは、中国の太極図の影響で始まったのではなく、蛇信仰を持つ各民族で自然に発生し、互いに相似性を見せ、王権成立後の文化の交流のなかで、関係性を深めたのである。日本では勾玉はすでに縄文時代に出土し、弥生時代の代表的玉器となっていて、中国にはるかに先んじている。

＝自然人アイヌ＝ こころの歌と踊り

第26回 沖縄とアイヌ

四宅 豊次郎 アイヌ文化伝承者

－伊良部島－

宮古島での公演が終わったので、次は伊良部島へ行くことになった。この島は大小八つの島々からなる宮古諸島のなかで、宮古島に次いで大きな島である。

^{ひらら}平良港から漁船に乗ってゆく。島^までの海上距離はおよそ8キロというので、間もなく伊良部島は近づいてきたが、山らしいものは見当たらず



伊良部島へ

遠くから眺めると、まるで^{まないた}俎板のような平坦な島だ。よく晴れた暑い日だったので、われわれ一行は半袖シャツを着ていたが、走航する船の上では少し風が吹きつけるので気持ちがいい。

沖縄へ来てからこのかたどうしたものか雨らしい雨に降られたことがない。この日も相変わらず直射日光がまぶしく、気温も25度くらいあるのではないだろうか。岸壁に着くとすでに現地の先生と数名の生徒が迎えに来ていたので、先生と挨拶を交わしてから学校へ向かう。少しの間、坂道を登って行くのだが、陸は風がなくて蒸し暑く、汗ばむくらいであった。

連れだって歩いている地元の中学生在が、こんなにカンカン照りの暑い日だというのに、黒い学生服を着ているので、私は気になり話しかけた。「ねえ君。こんなに暑いのに、どうして黒い上着を着ているの？」生徒はおかしなことを聞くものだという様子であったが、少し考えてから「今は冬ですから…」と、はにかむように答えた。そういえば今は2月の中旬である。南の沖縄といえども季節の上では真冬に間違いはない。北海道からみれば暖かい沖縄でも冬期間は、きちんと上下の黒い制服を着なければならない規則なのである。「冬ですから」という返事は正にそれ以上の言葉も説明もいらない。

この島では、3校で公演をしたが、アイヌ人が来たという珍しさもあって、近在の住民も集まって来て熱心に観てくれた。我々をこの島まで乗せて来た船は、どうやら1日チャーターされているようで、船頭ともう一人の船員も観てくれていた。帰りにアイヌ舞踊について感想を求めたと

ころ、「2度みたけれど、2度目は前よりも少し理解できて、とても良かった」と話してくれた。異文化に対して謙虚に理解を示してくれた二人には、私共としても嬉しい思いがした。

—池間島—

次の日は、池間島^{いけまじま}へ行く。この島は宮古島の北に浮かぶ小さな島であるが、人口密度は宮古諸島の中で最も高いという。小さな島の割には千人近い住民がいるので、わざわざこの島へ行くことになったのかもしれない。

ホテルから池間島に一番近い岬まで車で行く。岬に着くと眼前には、白く美しい砂浜が広がって汚れなど全くなくて、その向こうにはエメラルド・グリーンの海がある。メノコ達は、その美しい砂浜と碧く輝いている海に感激して、「まあー、なんとすばらしい！！」と、その風景を抱き込むように大げさなゼスチャーをして喜んでいた。

その日も朝から好い天気だったので、みんなはそれぞれにクバ笠を持ってきていた。この笠は蒲葵^{びろう}の木の葉を乾燥させて作ったものであるが、よく沖縄の農民や漁師が被って日除けや雨除けにしている。近くにサバニと呼ばれる、杉板をはり合わせた漁舟が陸あげされている。自分は漁師の家に生まれたが、このような舟を見るのは初めてなので、もっと寄って見ようと歩いて行く。やがて責任者のA氏が、今日の渡し舟を引き受けてくれたという4人の漁師を連れて来て、我々に紹介してから「このサバニで島へ行きます」と言う。

昨日は伊良部島へ小型漁船で行ったが、今日は近いから小舟で渡るというのでみんな大喜びをしている。私もいろいろな船に乗ったことはあるが、サバニに触れてみたのは初めてであるから、もちろん乗ったことはない。昔はウェークという^{かい}櫓で漕いだというが、現在は船外機を取り付けて航行していると話してくれた。

—この舟で小島へ渡るということは、どんな気分だろう—もう乗舟する前から、海の上を爽やかに快走してゆく思いが胸をよぎる。4艘のサバニに船頭の他



海水に素足を入れて



サバニの手入れをする漁師

に3名ずつ分かれて、縦一列に座って乗ったのだが、細長い小舟であるから人数はこれが限度である。船頭が「あぶないから、立ち上がったたり、舟を左右に揺らしたりしないように」と、前もって注意する。舟全体の造りが薄く、舟底の重みもないので安定感がないから、横揺れには弱いのである。島の岸壁にサバニは近づいた。船から岸壁に昇り降りするコンクリートの階段がついていたが、10数段もあるのでそのことによって、干満の差の著しいことを知ることができる。我々一行を乗せて来てくれた船頭達の話聞いて、驚くやら納得することができた。

毎年旧暦の3月3日に、宮古島の北方約3キロのところに「幻の大陸」が出現するという。総面積は宮古島本島にも匹敵するほどの大サンゴ礁群で、その昔は大陸であったという説もある。

この幻の大陸のことを「八重干瀬^{やえびし}」といい、延々と広がるサンゴのお花畑は魚介類の宝庫であり、この日には昔から舟を仕立てて、潮干狩りを楽しむ風習があるという。

この話を聞いている間、よそ者である私にもその情景が墨絵のようにうっすらと見えて来るような、不思議な思いに駆られたのである。《八重干瀬は、ニライカナイの神が海の幸を授けてくれるために、年に一度現れるのだ》幻の島に集い合った人々は、口には出さなくても心の奥底に、こう信じているのかもしれない。このように、いつもは海の中に沈んでいて何も見えない大陸が、ある日突如として姿を現わすというのだから、この周辺の海域は潮の干満の差がはなはだしく大きいことが解る。池間島も、やはり漁業を主として生活しているのだが、特にカツオやマチ類の一本釣りが盛んであるという。民俗行事や古い風習が数々残っている所だというが、残念ながらそれ等を見聞する時間はなかった。

ここでは、2カ所で公演を行ってから島を離れた。



当時の宮古平良港（昭和40年頃）



平良港棧橋から
平良市内へと続く道

アジアの舞踊、おりふしの想い ～中国伝媒大学&日本大学芸術学部～

日本大学教授 丸茂 美恵子

・中国伝媒大学との文化交流

本学芸術学部木村政司学部長からご指名を戴き、筆者は中国伝媒大学との交換教員として2018年11月13日から11月19日の7日間、北京に滞在した。私にとって、今後、中国との文化交流に大きな華が咲くだろうという予感を抱いて、いざ北京へと出発した。

中国の国家テレビCCTVに豊富な人材を出している中国伝媒大学(前名 北京広播学院)と本学部との交流は、実は前芸術学部長でいらした放送学科の野田慶人教授のご尽力による。数十年に渡る交流の中で交換教員として派遣されたのは映像系の教員がほとんどで、演劇学科からは私で2人目。今回の派遣者は私と放送学科兼高聖雄教授。同時期に中国



側からは張樹庭副学長、張鴻声大学院長はじめ【中国伝媒大学西門 宿泊は門前に建つ国際交流センター】め6名の訪日代表团と2名の交換教員を本学部で受け入れた。

私たちの滞在先は中国伝媒大学が経営する国際交流センター(ホテル)。初日はその中のレストランで演劇影視学院主催歓迎会が行われたが、少人数ということもあり少々殺風景。翌日はキャンパス内にある国際レストランで国際交流合作処主催歓迎会が催された。こちらも少人数だったが、親日家の王文淵副処長と張佩佩項目主管に出会え、暖かな雰囲気迎えられた。考えてみれば、今、訪日団と交換教員が芸術学部なのだから、少人数になるのはもったなことだった。その後に就任後間もない廖祥忠学長に表敬訪問をさせていただいた(URL:<http://www.cuc.edu.cn/zcyw/11702.html>)。

・演劇影視学院での講義

私たちはそれぞれが2コマの授業を担当した。私は「伝統芸能と最先端技術との融合」というテーマで、(1)日本舞踊(歌舞伎舞踊)の3D化、(2)日本舞踊の〈巧みの技〉の継承支援、という講義を行った。(1)は教育用コンテンツとして作成した「供奴」のCGで熟達度の差に



【演劇影視学院の建物 (撮影：兼高聖雄)】

よる足拍子の違いを聞き分けた。(2)は人間国宝の舞踊
モーションデータを解析し独自に開発した継承支援シス
テムで可視化して〈腰〉の安定性に着目した。

受講生は大学1～2年生で約35人。授業では、「供奴」足
拍子の私の実演、扇のワークショップ、学生による雲南省の
民族舞踊の披露…、ほとんどの学生が熱心に学んでくれ
た。驚いたのは授業が終わってからだ。男女の学生が別々
に質問してきた。要点は「機械で人の技が継承できるの
か？」という。もちろん「技は心と共に人から人へと継承され
るもの」。18、9歳の若い学生の授業だったのであえて表面
的にしか講義しなかったが、学生の優秀さには感嘆した。

この授業は、日本語学科4年生で通訳の汪佳蓉さんのお
陰で成功した。彼女がご自分のパソコンを貸してくださり、何から何までお世話いただいた。もう
一人、兼高教授担当の通訳は同じ日本語学科4年生の楊爽さん。二人とも日本の女子大学に
留学経験があり、偶然にもそこで日本舞踊を習ったそうだ。とても親日家なのである。



【筆者と蘇東花さん 大学内の国際レストランで】

・正乙祠戲楼で越劇鑑賞

滞在中、盟友・中国戯曲学院元教授の蘇東花さんと面会した。京劇を観る伝統的な劇場を
教えてもらい、蘇さんのお薦めで私は正乙祠戲楼に行くことにした。正乙祠戲楼は「中国の劇
場の生きた化石」と呼ばれる、最古の木造室内劇場である。あいにくとその日は京劇公演はな
く、上海越劇院による「紅樓夢」が上演されていた。越劇は女性だけの劇団で、演目は中国国
民に愛されている古典文学『紅樓夢』の古戯楼版であった。チケット代は思いもよらず高額の
880・680・480・280 元。私は通訳と 480 元のチケット2枚を手配し、夜 7 時 30 分開演に間



【筆者の下手側は花道だが途中で切れている】



【舞台の上手側にあるピロティ】

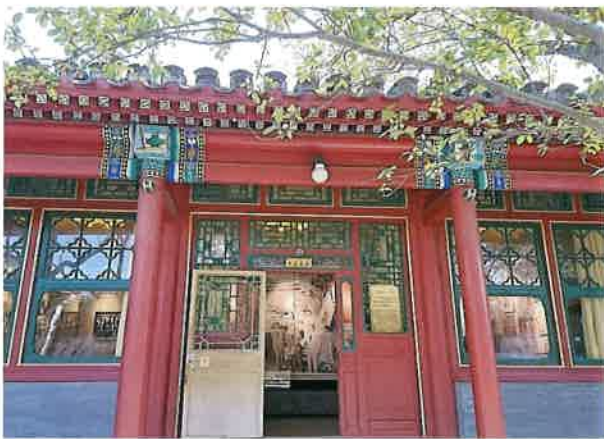
に合うようタクシーで乗りつけた。降りた場所は真っ暗の胡同の界限で露路の奥に劇場があるらしいが、「北京の古い劇場は路地の奥にある」という通訳の言葉に渾沌とした思いが交錯した。開場時は閑散としていたのだが、約 180 席の客席は、大部分が地元の老若男女で満席になった。劇場の構造をフル活用した演出は客との近さを強調し、〈黛玉葬花〉の紗幕を使ったシーンも麗しかった。



【正面に名優梅蘭芳の胸像が建てられている】

・四合院造りの梅蘭芳記念館

私は今度の出張で京劇についてもっと知りたいと思っていた。そこで、2006年の訪中の時には実現しなかった梅蘭芳記念館を訪ねることにした。京劇の名女方・梅蘭芳が晩年に過ごした邸宅は伝統的な四合院造り。アメリカ、ソ連、そして日本への巡業や歌舞伎との交流を証明する沢山の写真が東・西廂坊に展示されていた。中庭の正房前には左右対象に木が植えられ、正房の回廊には天女の絵、東・西廂坊の回廊にも四君子(蘭・竹・菊・梅)の絵が掲げられていた。艶麗な女方そのものを表す佇まいから梅蘭芳の匂うような芸が浮かんできた。



【四合院の東廂坊
西廂坊とも室内には写真が展示されている】



【左は梅蘭芳の若い頃の麗姿、
右は歌舞伎俳優との交流】

私と通訳は梅蘭芳記念館を訪ねる前に恭王府を見学してきた。恭王府は乾隆帝に寵愛された悪名高い和珅^{わしん}の広大な私邸でお抱えの京劇団の舞台を楽しんだ大戯楼も建てられているという。梅蘭芳記念館は恭王府から近かったので古い街並みを歩いて行った。その通り沿いに大劇場や小劇場があった。まだまだ興味の尽きない京劇の世界である。

・国際交流合作処主催送別会

最終日は日曜にもかかわらず、王副処長と張さんが火鍋店で送別会をしてくださった。お鍋の辛さも忘れるほどの熱い・篤い会合だった。王副処長は明朝早く、廖学長と数ヶ月の海外訪問へ出発するという。そのパワフルさに脱帽！

明朝、私たちも6時にホテルを出発しなければならない。まだ夜が明けないうち、汪さんと楊さんはキャンパス内の寮からやってきた。空港へ向かうタクシーのなかで彼女たちはメッセージカードを下さった。とてもきれいな文字でカードには、“…日本人は人間関係を円滑に「芸術」と言えるほどの工夫がされたんだと感じた…丸茂先生のおっしゃっていた通り、文化というものは機械ではなく、人でしかちゃんと伝わらないものだから、私も日本の「思いやり」文化、「気を使う」文化を守り、世界へ伝えたい…”(汪)と書かれてあった。何と実りの大きな出張であったろうか。

最後に、出張にあたっては本学部の樋口肇庶務課長と伊藤翼課員(当時)に行き届いた準備をしていただいた。ここに感謝申し上げたい。



【左から楊さん、兼高聖雄教授、王氏、汪さん、筆者、張女史】

彩色画「落成宴図」に見る韓国舞踊

伊藤 好英 藝能学会会長

1796年(正祖20)10月16日、三年に及ぶ工事を経て完成した華城(水原城)の落成の宴が、城域内行宮の「洛南軒」で開かれた。2016年に、フランスのフランソワ・ミッテラン国立図書館所蔵のハンデル本『整理儀軌 三十九 城役図』の中に発見された彩色画「落成宴図」には、その宴の様子が描かれている。極彩色で細密に描かれたこの絵画を通して、われわれは、韓国芸能史(韓国舞踊史)の一断面を窺い知ることができる。

この絵画の一番の特徴は、宮廷の芸能と民間の芸能とが共に描かれていることである。全体は三つの空間に分けられる。一番奥の空間である大庁^{テ・チョン}には、水原^{ス・ウオン}の長官と招待客が座を占めている。二番目の空間は、大庁と同じ高さに臨時の床を設けて天幕を張った「補階^{ボ・ゲ}」と呼ばれる場所で、そこでは「呈才^{チョン・ジェ}」と呼ばれる宮廷芸能が行われている。三番目の空間は野天の庭で、三つの階段の下で補階の演戲を見ているのは両班であるが、その背後で行われているのは民間の演戲で、それを立ったままで見ている観客には庶民の姿が多く混じる。このような上下同楽には、王正祖^{チョン・ジョ}の特別な意志が反映されている。

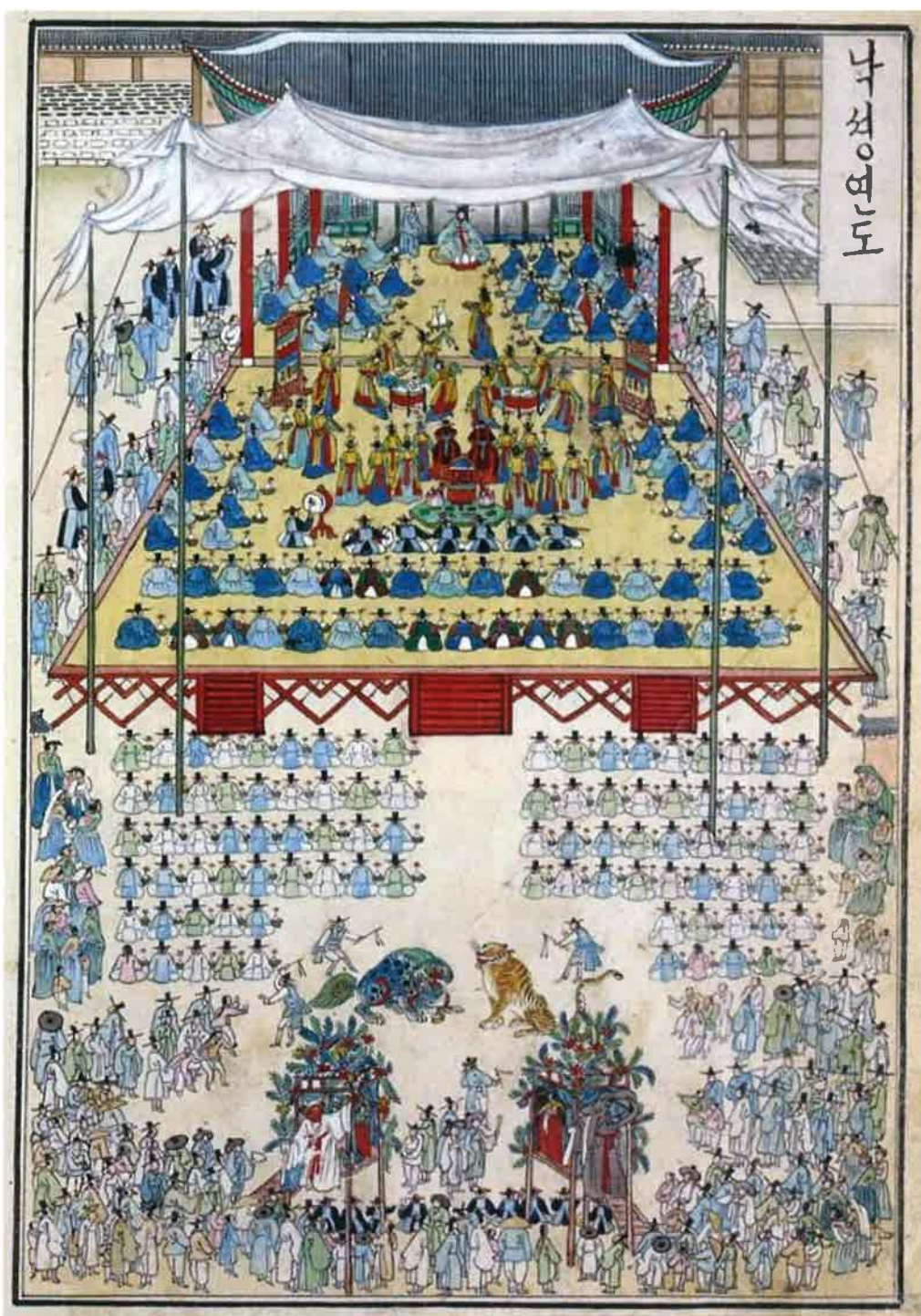
補階の上では今、舞鼓^{ム・ゴ}の演戲が行われている。舞台の上に大きな太鼓を水平に二つ置き、それぞれの太鼓の周囲で、頭に華を挿した女妓^{ヨ・ギ}たちが撥で太鼓を打ちながら舞を舞っている。楽士が打つ太鼓がもう一つ、ずっと手前に見えるが、その横に並んだ六人の楽士たちもこの舞のための演奏を行なっている。楽士たちと舞との間に立っている女妓は合唱隊であろうか。

舞鼓の舞の左右には、抛毬^{ボ・グ・ラク}楽に使う抛毬門^{ボ・グ・ムン}が置かれ、楽士たちの前には、蓮華台^{ヨン・ファ・デ}に使う池塘板^{チ・ダン・バン}が置かれている。抛毬楽は、女妓が東西二手に分かれて舞いながら、色毬を抛毬門の真ん中に開けられた丸い穴に投げ入れる遊びである。蓮華台は、大きな蓮の造花を二つ舞台に置き、女妓たちの舞のさなか、蓮の中から二人の童女が出現する舞踊である。これら舞鼓・抛毬楽・蓮華台は、高麗時代から行われてきた宮廷舞踊であるが、朝鮮王朝後期にあたる正祖の時代においても、宮中や行宮において人気のレパートリーであったことが、この絵画によって確認できる。

次に、目を庭上に移すと、そこでは民間芸能である動物舞いと仮面舞が行われている。動物舞いは虎舞と獅子舞である。獅子舞^{サ・ジャ・チュム}は現在、北青獅子^{ブク・チョン・サ・ジャ}ノリ・鳳山^{ボン・サン}タルチュム・康翎^{カン・ニョン}タルチュムなどの中で、辟邪的な性格を持って広く行われている。しかし虎舞に関しては、このような辟邪的な舞としては現在行われていない。この絵画は、当時このような虎舞が行われていたことを示す唯一の資料となっている。

もう一つの民間芸能である仮面舞は、綵棚^{チェ・ブン}と呼ばれる一種の山台^{サン・デ}を用いて行われている。登場人物は、右の綵棚の上に僧と妓生、左の綵棚の上に酔僧と妓生、四人はそれぞれ仮面を付

けてこれから演劇的な舞を展開しようとしている。これは他の複数の文献に見られる曼碩僧舞^{マンソクチュンチュム}の一場面と思われる。曼碩僧舞は、現存の仮面舞^{タルチュム}の中の老長舞^{ノジヤンチュム}の原形に近いものと見られ、仮面舞の歴史的考察にとっても本絵画は極めて貴重な材料を提供している。韓国舞踊史にとって、彩色画「落成宴図」発見の意義は、決して小さなものではなかったと言える。



『整理儀軌 三十九 城役図』の彩色本「落成宴図」(フランス フランソワ・ミッテラン国立図書館所蔵、高麗大学校博物館編『朝鮮の演戯と遊び(조선의 연희와 놀이)』民俗苑 2018年より)

民俗芸能のいま

齊藤 裕嗣 東京文化財研究所(無形文化遺産部)客員研究員

満開の桜の花が春風に散り始めるころ、京都市北区の紫野では「やすらえ、ハナヤ」(花よ、安らかにあれ)の歌にのせ、赤い上衣にシャグマをかぶった青年達が、左手に掲げた太鼓や鉦を、右手のバチや撞木で打ちながら、大きく跳躍して踊る。一行には、童子二名の鞆鼓役に大勢の笛役、頂上に生花を挿した大ぶりの風流傘や鉾などが加わる。「やすらい祭」と呼ばれるこの行事は、踊り手や風流傘に、春先の流行病を引き起こすという疫神をよせ付けて送り出すものといい、1154年の公開の様子や歌詞が記録され、1780年刊行の冊子に図が紹介されていて古くからの伝承であることがわかる。



京都・やすらい祭

現在、やすらい祭は、四地区の人々が、それぞれに演じている。期日は江戸時代には3月10日であったが、明治以降、4月10日になり、今は三地区が4月第二日曜日、他の一地区は5月15日になった。また、かつては四地区が今宮神社内の疫神社に奉納したというが、今、同社披露は二地区で、他は遙拝する形式となった。期日は、旧暦から新暦への改変に応じ、その後の日曜への変更は参加しやすさへの配慮である。5月への変更は当該地区の上賀茂神社「葵祭」に合わせたもので、これも参加者への配慮とのこと。疫神社への奉納の変化は祭礼時間短縮のためという。いずれも人々の生活の変化に応じたものである。また今は地区ごとに異なる歌詞があり、踊りぶりにも少し違いがあるが、これは地区ごとに伝承するという独自性を尊重したためであらう。



京都・やすらい祭

我が国の民俗芸能は4万件とも5万件とも言われるが、いずれも過去から現在に至る人々の生活の変化を示す重要な文化遺産であり、我が国の多彩な芸能文化を示すものである。仮に似ているように見える民俗芸能でも、これを伝え演じる人々にとっては、それぞれが唯一無二なものであり、その伝承と公開に参加することは、自身と地域の結びつきを再確認する非常に有効な手段の一つとなっている。

民俗芸能は、いつの時代でも、地域の人々が地域のために継承し、その生活の変化に応じて、伝承や公開の有り様を変えつつ現在に継承されてきた。地域にとっての、このような民俗芸能の重要性から「文化財保護法」や「芸術文化振興基本法」さらにユネスコ「無形文化遺産の保護に関する条約」などによって、種々の支援策が展開されている。しかし一方で日本の総人口は平成22年の約1億2800万人を最大として以後減少し、対して高齢者人口は23年後に約3900万人まで増加し、また東京都以外の人口は大きく減少すると推定される。つまり民俗芸能を継承する「地域」自体が減少していくことになる。

民俗芸能は、現に生活している、地域の人々による伝承公開が第一だが、例えば東京文化財研究所で準備しつつある「無形文化遺産アーカイブス(全国版)」などで全国的に情報を収集発信するとともに、文書や映像等による的確な記録作成の充実が切実に期待される。

やすらい祭と同様に、子供達が大切な役割を果たしている各地の民俗芸能の、ごく一部だが写真で紹介したい。



「南須釜念仏踊り」福島県石川郡玉川村
(4月8日、8月14・15日)

念仏や和讃を唱え、鉦や太鼓を打ちながら踊る念仏踊は、全国各地に、多様な姿で伝承されている。ここでは念仏に合わせて少女達が振り美しく踊る。



「阿万の風流大踊小踊」兵庫県南あわじ市
(毎年9月15日に近い日曜)

本来は雨乞い祈願の踊りだったが、今は亀岡八幡神社の秋季大祭で踊る。写真は近世初期に流行した小歌踊をしのばせる大踊で、他に江戸中期の小踊もある。



「黒丸踊(大村の郡三踊のうち)」長崎県大村市
(おおむら秋まつり[10、11月]ほか)

大村市の寿古、沖田、黒丸の3地区には、それぞれ特色ある風流踊が伝わる。写真は黒丸踊で、大きな花輪を背負った大花輪と、旗を背負った大旗が、背負い物を左右に揺らしながら太鼓を叩きながら踊る。



「チャッキラコ」神奈川県三浦市
(毎年1月15日)

近世初期に流行した小歌踊が、港町に伝わったともいう。今は少女達が海南神社で披露した後、町内の家々を



【京劇の名女方梅蘭芳が晩年に過ごした邸宅 正房の華奢な趣】
(写真提供:丸茂美恵子氏)

舞踊文化 E T C No.28 2019年5月9日発行
 発行人 加戸守行 編集人 黛民族舞踊文化財団事務局
 〒107-0052東京都港区赤坂3-10-3 黛ビル4F
 TEL 03-3583-3633 / FAX 03-3583-3639
 ホームページ <http://www.mayuzumi.or.jp>
 一般財団法人 黛民族舞踊文化財団